

隠匿することが時間知覚に及ぼす影響

松本 あや乃

これまで嘘に関する研究はたくさん行われてきた。その嘘をつくという行為の中で、本研究では隠匿する行為に焦点をあてた。隠匿について検討している研究の多くが隠匿情報検査 (Concealed Information Test: CIT) を用いている。CIT では、参加者に模擬窃盗をさせたあとに、盗んだ物品を含む数種類の物の写真を見せて、「あなたが盗んだ物はこれですか？」と質問し、その生理反応を見ることによって参加者が隠匿している物品を検出する。このような研究の1つである Matsuda, Nittono, & Allen (2013) は、検査中の脳波を測定した結果、隠匿している項目の写真に対して回避動機づけが働いているという可能性を示した。

一方、接近動機づけや回避動機づけが時間知覚を変化させるという知見が得られている。Gable & Poole (2012) は、接近動機づけが働いているときには時間を短く知覚し、回避動機づけが働いている時には時間を長く知覚するという結果を示した。

以上の先行研究をふまえて、本研究では、隠匿している項目に対して回避動機づけが働いたら、その項目の写真が提示されている時間は長く知覚されるという仮説を立てた。そしてこの仮説を検討するために2つの実験を行った。

実験1では、間隔二等分課題という課題を用いて実験を行った。その結果、仮説は支持されなかった。時間知覚の変化に対するこの課題の感度が低かったことが原因として考えられた。しかし、隠匿している状態において時間を長く知覚するという傾向が認められたので、問題点を改善するために課題を変え、実験2を行った。

実験2では、画面上に提示される写真刺激の持続時間が、基準となる時間と比べて、「長い」「同じ」「短い」のいずれであったかを3択で答えさせる方法により、時間知覚を測定した。実験2においても隠匿している項目の提示時間が他の項目の提示時間よりも長く知覚されるという結果は得られなかった。しかし、隠匿している条件(有罪条件)では、隠匿していない条件(無罪条件)よりも、すべての項目の持続時間を長く知覚していた。また、課題中の皮膚コンダクタンス水準は、有罪条件のほうが無罪条件よりも有意に高かった。これは、隠匿している項目に対する回避動機づけにより、有罪条件では高覚醒状態が続いたためであると考えられる。これまでの研究により時間知覚は覚醒の影響を受けるとされている。一般的に経過した時間の推定は、体内にある内的時計という仕組みの中のペースメーカーがパルスを出し、それがアキュムレーターに蓄積されることによって行われていると考えられている。このモデルにおいては覚醒が高くなるとパルスの発生が速くなり、一定時間に蓄積される量が増える。そのため、実験2においても同じ時間であるにもかかわらず覚醒度が高まったことで有罪条件において経過時間をより長く感じていたのであろう。

本研究では嘘をついている対象物を見ている間は時間を長く知覚するという仮説をたてて実験を行った。結果としてこの仮説は支持されなかったが、隠匿している状態では回避動機づけが働くことによって、対象物ではない他の物品に対しても経過時間を長く知覚するという新たな知見が得られた。今後はこの説を検証するための実験をしていくことが必要であるだろう。(基礎心理学)